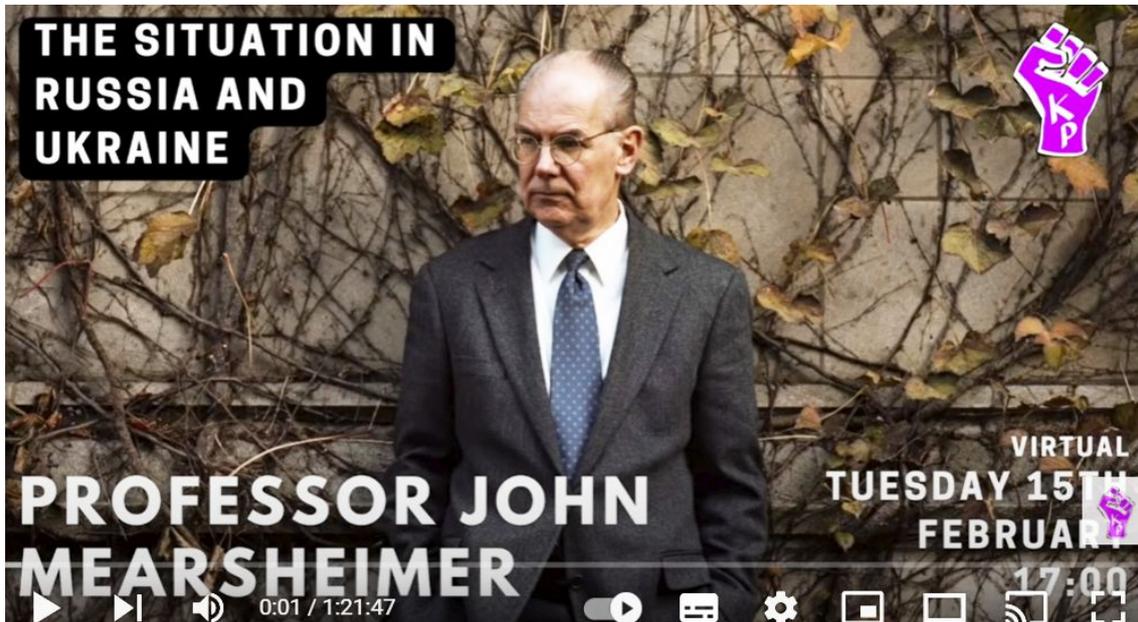


2022/02/22

ジョン・ミアシャイマー

ウクライナ危機の責任は NATO にある



https://www.youtube.com/watch?v=Nbj1AR_aAcE

はじめに

米国の政治学者で、国際関係や安全保障研究で日米の政策担当者のなかに大きな影響力を持つジョン・ミアシャイマー（シカゴ大学教授）がロシア軍のウクライナ侵攻直前の2月15日、ユーチューブ・チャンネル「キングス・ポリチックス」に出演し、「ウクライナ危機の責任はNATOにある」と持論を展開しました。以下のようにのべました。

I 危機の起源と歴史

ウクライナ危機の全体像を20分で話すよう要請されました。

2つのことを話したいと思います。まずこの危機の起源と歴史についてです。

それから、なぜ今これが大に注目されているかの理由についてです。

そして結論として「われわれはどこに向かおうとしているのか」について、いく

つか述べたいと思います。

西側における一般的な見方は、英国や米国においては確かに真実ですが、つまりこの危機の責任はプーチンやロシアにあるというものです。善人と悪人が存在し、もちろん**我々が善人でロシアが悪人**というものです。

しかしこれはまったく間違っています。米国と同盟国にこそこの危機の責任があります。プーチンでもロシアでもありません。

なぜ私がそんなことをいうのか。西側が2008年以降おこなおうとしたことを理解することが重要です。

ウクライナを西側の防壁に

2008年はウクライナをロシアと国境を接する西側の防壁とするための転換点でした。この方針には3つの側面がありました。

第一は、最も重要なのですが、**NATOの拡大**です。NATOを、ウクライナを含めた東方に拡大するという考えでした。

この戦略の第二の要素は**EUの拡大**です。別の言葉でいえば、ウクライナを取り込もうとしたのはNATOの拡大だけでなく、EUの拡大でもあったわけです。

戦略の3つ目の要素は**カラー革命**です。ウクライナの場合は「オレンジ革命」でしたが、それはウクライナをイギリスやアメリカのような自由民主主義体制へと変えるためのものでした。自由民主主義だけではなく、アメリカと同盟をむすぶ自由民主主義です。

それらの3つはまとまった戦略でした。なぜなら、ウクライナをロシアの国境に面した西側の防壁とするべく計画されたものだったからです。

NATOは一線を越えた

先にのべたように、この戦略もっとも重要な要素はNATOの拡大でした。だからこそ2008年4月のブカレストでのNATOサミットが計り知れないほど重要だったのです。

2008年4月のブカレスト首脳会談の終了にあたって、NATOは、ジョージアとウクライナを自らに組み込むことを宣言しました。彼らはそれを実行すると言い

ました。ロシアはその時点で、それは許さないと明確に表明しました。ロシア人は超えてはいけない一線だということを示したのです。

反撃を開始したロシア

ご存じのとおり2008年の会談以前に、NATOの拡大には2つの大きな画期がありました。第一の画期は1999年、ポーランドとハンガリー、チェコ共和国を取り込むものでした。第2の拡大は2004年です。ルーマニアやバルト3国などをとりこんだのです。

ロシアはそれらの拡大を受け入れました。それらを激しき嫌悪しましたが、2度の拡大をうけいれたのです。

そして2008年にNATOが「いまや拡大にはジョージアやウクライナもふくまれる」といった時、ロシアは超えてはいけない一線を設けたのです。

ロシアが「それを許さない」としたことを理解することは重要です。2008年8月、つまり同年4月のブカレスト会議の数カ月後に、ロシアとジョージアが戦争状態に入ったことは偶然ではありませんでした。ジョージアはウクライナとともにNATOへ加入する予定だったことを思い出してください。ロシアは「そんなことは許さない」と言ったのです。そして戦争になったのです。2008年8月のことです。

2014年のウクライナ危機

2014年2月22日に、ウクライナをめぐる危機が発生しました。それは主にウクライナ国内のクーデターによって引き起こされたものでした。親ロシア派の指導者を転覆させて親米派の指導者を据えるものでした。米国はそのクーデターに関与しており、ロシアは激怒しました。何ら不思議はありません。

ロシアは激怒し、**2つのこと**をしました。一つはウクライナからクリミアを奪いました。なぜそんなことをしたのか。クリミアには「セバストポリ」という重要な海軍基地があり、ロシア人がセバストポリをNATOの海軍基地にするのを許すわけがありません。そんなことはありえません。それが、ロシア人がクリミアを占領した原理的な理由です。

ロシア人がした第二のことは、2014年2月の危機の直後、ウクライナ東部で発生した内戦を利用したことです。ロシアがしたことは、その内戦をたきつけて、かれらの同盟者、ウクライナ東部の主にロシア語を話す人びと、多くの場合ロシア人ですが、彼らがウクライナ政府に打ち負かされないようにしたのです。

彼らは事実上ウクライナ政府を破綻させています。ロシア人は基本的にこういいます。「我々はウクライナがNATOに組み込まれるのを許す前にそれ（ウクライナ）を破壊する」

ですから、これを理解することはとても重要なのですが、2014年の最初の危機の勃発は、2008年のブカレスト会議にたいする反応なのです。ロシアの反応は2重です。第一にクリミアの占領で、クリミアは奪われ二度とウクライナに戻ることはないことを理解すべきです。第二に、ロシア人が暗黙の裡に行ったことですが、「我々はウクライナを破壊する。ウクライナがNATOの一員に組み込まれることを許す前に」ということです。

II ロシア政治の基本__「リアルポリティーク」

今、問いたいことは、なぜロシア人はそんなことをするのかという点です。それは「リアルポリティーク（現実政治）」の基本です。西洋特にイギリスやアメリカにいる人々は理解しないと思いますが、私はそのこと自体にビックリし、理解にくるしみます。

「世界一強大な米国によって運営され軍事同盟がロシアの国境まで達してもロシアが気にしないだろう」などという発想自体が考えられません。米国にいる我々にもモンロー・ドクトリンがあります。モンローはこう言っています。「遠隔地のある覇権国が、西半球にある国家と軍事同盟を結成することは許さない」と。

もちろんその軍事力が西半球に入ることは許されません。

私はキューバのミサイル危機をよく覚えています。起きたことは、ソ連がキュー

バに核ミサイルを配備したことです。米国はそれを「断固として許さない」と言いました。遠隔地の軍事力が西半球に及ぶことは許されないのです。キューバ危機を経て、その結果、ミサイルは撤去されました。

その後ソ連はキューバのシエンフエゴス港に海軍基地を築こうとしましたが、米国は、正確な言葉はわかりませんが、「あなた方のシエンフエゴスにおける海軍基地は許されない」といいました。それは許されないのです。米国は西半球をみずからの裏庭とみなして、そこに遠隔地の大国が入り込むのを禁じているのです。

「今後はもう許さない」

皆さんは、ウクライナが米国によって自らの国境に接する防壁とされるのをロシア人が恐れるとは思いませんか。もちろん恐れるのです。そしてロシア人はブカレスト首脳会議の直後、我々に向かってはっきりと明確にしていたのです。「ウクライナはNATOの一部になってはならない」と。

もちろん米国とその同盟国はそれに耳を傾けませんでした。なぜなら我々は善良であり、米国は穏健な覇権国であると米国では信じられているからです。我々は世界中で欲することを何でもできました。しばらくはそのままいけるように見えました。それは、申し上げたように1999年にロシアが受け入れたからであり、2回目の拡大も受け入れたからです。しかしブカレスト会議の後彼らはいいました。「今後はもう許さない」と。

そして大きな危機が起きました。2014年2月の危機です。それはかなり抑えられてきました。しかし昨年、2021年秋にその危機は強まり始めます。そして2022年初頭、本格的危機と化したのです。

ここでの疑問は、今になって何が起きたのかです。なぜここ危機が突如として前面にでて再び注目されたのか。その答えは、**米国とその同盟者がウクライナを「事実上」NATOに組み入れた**ことです。いま多くのレトリックを耳にすると思います。「ロシア人は恐れる必要は何もない。誰もウクライナをNATOに加盟せるとはっていない」と。それはそうでしょう。

米国はロシアの善良な隣人であったのか

しかし米国が実際におこなっていることをみれば、事実とことなります。

第一にトランプ政権からバイデン政権にいたるまで、米国はウクライナを武装化しているのです。オバマ政権時代はしていませんでした。2014年2月に危機が発生した時点やその後の数年間、オバマ政権が権力を維持しているときは、米国ウクライナ人の武装化を拒否していたのです。なぜなら我々はそれがロシア人を怖がらせると知っていたからです。

ロシア人の視点を理解しましょう。ウクライナがNATOに加盟することは（ロシアにとって）みずからの存続にかかわることことなのです。それが今起きていることです。

ロシアは西側に明確なメッセージを送っています。

それは、「我々はこの脅威を深刻に受け止めている。この脅威を取り除くために必要なら軍事力を使う用意がある」というメッセージです。ロシア人は大真面目なのです。

Ⅲ 2021年に起こったこと

それゆえに2021年に起こったこと、それはもちろんトランプ時代から始まっていたことですが、我々がウクライナを武装化してきたことです。

ウクライナの武装化について話したときは、それはウクライナの軍事力であり、ウクライナ東部のロシアの同盟者と戦いうるものなのです。

ロシア人を極めて怯えさせたことの一つは、トルコがウクライナにドローンを提供したことです。ドローンは戦場できわめて効果的な兵器になっています。アゼルバイジャンの視点からも、それは昨年アルメニア人とのたたかいで、アゼルバイジャン人はトルコ製のドローンを使っていたのです。トルコ人がドローンを、アメリカ人やイギリス人が別のありとあらゆる種類の兵器をウクライナ人に提供しているのです。

もちろん我々は、それらの兵器を「防御用兵器」と定義するでしょうが、理論家のより洗練された視点をもってすれば、おわかりいただけるように、防御用兵器と攻撃用兵器に意味ある違いはありません。「安全保障のジレンマ」というやつです。我々にとって防御的なものも相手にとっては攻撃的なものに映るのです。ウクライナ人にドローンを提供しても、ロシア人はそれを防御的なものとみなすでしょうか。私はそうは思いません。イギリス人やアメリカ人がしたようにウクライナ軍の訓練を始めても、「ロシア人はそれを脅威とみなさない」とお考えですか。私は「彼らはそれを脅威とみなす」ことを保証します。

「ウクライナは味方」はただのレトリック

ここで何がおきているのでしょうか。我々はウクライナ人を武装し訓練し、基本的にウクライナ人を同盟国かパートナーでもあるかのようにみなします。それは我々がウクライナについて議論する際に使うレトリックの一つです。

外交的・軍事的に、ウクライナと西側、特に米国との紐帯は強化されているようにみえます。

同時に我々はウクライナの外でいくつかの挑発的な行動をおこなっています。それはロシアを極めて刺激しています。英国は昨年夏、愚かにも駆逐艦を黒海におけるロシアの領海を航行させました。2021年6月のことです。ロシア側の海岸線にそって飛行させたのです。それはロシアを非常に怖がらせました。驚くまでもありません。

ここで見えてくることは、ロシア人はNATOが東に拡大していると強く実感していることです。NATOがまさに、ロシアの国境にまで拡大しようとしていることです。その理由は、主にウクライナがこの同盟の「実質的に」一員となっていることにあります。そして挑発的な政策として、イギリスの駆逐艦やアメリカの爆撃機があります。

ロシアのラブロフ外相は「沸点に達した」といいました。彼らは沸点に達したのです。彼らはもはや交渉に関心をもたないでしょう。彼らが欲することは現状変更です。その結果大規模な軍事増強がおこなわれ、危機の前から破綻していたウクライナ経済に打撃を与えることになりました。それゆえ、ウクライナの状況は

より悪化しています。

ロシアは西側に明確なシグナルを送っていたのです。「もしも彼ら（西側）が賭け金を上げるなら、我々（ロシア）も賭け金を上げるぞ」「ウクライナがNATOの一部になることは許さない」と。これこそが、今日われわれが直面していることです。

この危機は2008年の4月までさかのぼれます。ウクライナをNATOの一部にする決定、それこそが「起源」なのです。そして2014年2月に危機がおきました。その危機は時を経るごとに幾分改善され、注目度はいくぶん落ちたように見えました。しかし突如、再びそれがおきたのです。

危機を鎮静化させるべき希望とは？

現在、この危機を鎮静化させる何か希望はあるのでしょうか。私が考える最善の解決法を申し上げます。明白な解決法です。

それは、今現在はすでに受け入れられないでしょうが、**ウクライナを中立的な国家にすること**です。おおよそNATOとロシアの緩衝地帯のような。

これは2014年2月までは効果的なものでした。ウクライナは1991年12月のソ連崩壊の際に独立しました。1991年12月から大まかにいって2014年2月まではウクライナをめぐる本当の問題は存在しなかったのです。米国と同盟国はウクライナを巡ってロシア人とたたかいていませんでした。確かに2008年のブカレスト会談では論戦はありましたが、危機は存在しませんでした。なぜならウクライナは1991年から2013年までは一貫して効果的な中立国であり、緩衝地帯だったからです。

その状況変えてまったのはNATOです。我々（米国）はロシアを悪者するためにレトリックを変えたとお気付きになったでしょう。

こんな話が聞かれます。「ロシアは第二のソ連邦の再興を決意した」「ロシアは大ロシアの再興を望んでいる」「ロシアは悪者だ」などです。これは2014年2月22日以降に作り出された物語です。それ以前はそんな議論した人はいません。

2014年2月22日以前に、「ロシアを封じ込めるためにNATOを拡大しなければならぬ」と議論したものはありませんでした。2014年2月22日に起こったことは、我々によって生み出されたウクライナをNATOに組み入れるための馬鹿げた戦略のものなのです。

その政策自体の欠陥のせいで、それが台無しになった時も、我々は失敗を認めようとしませんでした。むしろロシアのせいにしたのです。

我々はこういいました。「ロシアは東欧の支配を目論んでいる」と。もちろん、今日でも同じ議論を聞きます。「ロシアは悪者で、プーチンはとても危険だ」「我々は彼と交渉することはできない。それはミュンヘン宥和の繰り返しだ。別の言葉でいえば、プーチンは第二のアドルフ・ヒットラーである。ウクライナを巡って取引することは、1938年10月のチェコスロバキヤをめぐる取引と等しい」と。それらは純粋でおめでたくナンセンスです。2014年2月22日以前にはロシアの脅威などなかったのですから。なかったのです。**我々が話をでっちあげたのです。**

だがいずれにせよ理想的な状況はこうでしょう。つまり中立的なウクライナの創出です。それは1991年から2014年まで存在していたウクライナです。

ですが、もはやそれはできそうにありません。なぜならアメリカ人はNATOの拡大に関していかなる譲歩も行おう気がないからです。さらにまたウクライナの中立化のためにも、キエフの中央政府にとっても、ドンバス地区のロシア語を話す人びととのある種の暫定協定に達することが重要です。これが有名な「ミンスク合意」です。**キエフの政府は「ミンスク合意」を実行する義務**があります。この問題が解決される前に、ドンバス地区とウクライナ西部の住民との内戦が沈静化されなければなりません。しかし現在、ウクライナ政府内の政治は、それを不可能にしています。

再度申し上げれば、現在のバイデン大統領がNATOの拡大を断念する様子を想像することは不可能です。それゆえ、この結末は延々と続く危機なのです。それが私の私見のなかの悲しい現実です。

(了)